序に代へる。

（桑原博士東洋文明史論叢、昭和九年八月）

白鳥博士の思出

暮から春にかけて親しき交りの老弱、さては骨肉までもの頻々たる訃音に悲みの絶える間もなく、いつまでも調はぬ寒々した氣候に呪を寄せて、熙々たる春光を待ちわびた三月の末日、またもや白鳥博士の危篤、ついで永眠の悲電に接した。まさかとは思ひながらもなほ何かの間違ではないかと幾たび電文を讀み返したことであつたが。

「この地氣候快適氣分も宜しく云々」のいつもの達筆をふるはれた湘南の便りに接してからまだ一月も經たぬ時ではあり、東都の友人たちからの報道にも、博士の日增に健康を回復せられつゝあることが傳へられてあつて、かゝる悲報を受けやうとは夢にも思はぬことであつたからである。併し同日つぎつぎに齎される諸方の通報は、疑つて見ようにも見方もないものばかりで、巨星地に隕つの恨を懷いて、たゞ悵然たる外はないのであつた。思へば明治三十七年始めて博士の謦咳に接してから、四十年にも近い歳月を通じて不斷の教導と激勵とを蒙り、ひたすら學究の途を辿るを得た自分にとつては、先生に對する追想は追慕と共に綿々として盡きぬ。これを詳かに書き綴ることは別の機會を選ぶことゝして、こゝには編者の需に應じて、たゞその學問を中心に二三の思出を記して見よう。